

フェデラーの強さは何か

今年の全豪オープン・テニスはフェデラーの完勝に終わった。昨年の決勝でナダルに敗れ、涙を流したフェデラーである。クレーの名手ナダルに、得意とする芝のウィンブルドンに続き、全豪のハードコートで負けた意味は小さくなかった。若手の台頭や体力的な衰えを考えれば、大方がフェデラーの苦戦を予想したのも当然だろう。事実、昨年のウィンブルドンと全仏で見事優勝したが、全米オープン決勝での敗退はフェデラー時代の黄昏を予感させた。以前のような眩しさが、フェデラーから消えている。

その予感通り、昨年末の ATP ファイナルの予選リーグでは全米決勝につづいてデル・ポトルに連敗し、決勝ラウンドでもダヴィジェンコに敗れて、タイトルを取れなかった。年初のカタール・オープンでも再びダヴィジェンコに破れた。昨年末からダヴィジェンコは絶好調で、ナダルに勝ってカタール・オープンを制したのだから、ブロックの勝利というわけではない。ただ、ここがスポーツの面白いところで、アスリートの好不調には波がある。若手とは言えないダヴィジェンコの好調がどこまで続くか、フェデラーは年末・年始の負けからどのような準備をして全豪を闘うか、そこに大会の興味があった。

驚くべきタフさ

好不調の波が激しくなったフェデラーだが、四大大会だけを見ると、過去 26 大会ですべてベストフォーに進出している。これは今後、誰にも成し遂げられない記録だろう。とにかく故障に強くなければ、パワーテニス時代にこれだけの記録を残すことは不可能だ。今のテニス界は一昔前とは違い、もの凄いパワーがぶつかり合うから、5 年も 6 年も無傷で頂点に立てること自体が驚異である。

ほん少し前まで、テニスはパワーではなくラケットさばきが物を言う世界だった。手首を痛めるから軟式テニスのようにラケットを振り切ってはいけないとも指導された。ところが、チェコのレンドル、アメリカのコナーズ、スウェーデンのボルグが台頭してから、テニス世界の常識が変わった。レンドルの並はずれたパワー、コナーズの両手打ち、ボルグのスピッシュが現代テニスの興隆を導いた。テニスと無縁だったパワーのあるアスリートが、1980 年代末から続々とテニス界へ参入し、新しいテニス時代が開かれたのである。そして、今、2m 近い上背、80~90kg の巨漢選手がラケットを振り切ってくる。サーヴのスピードが 210~220km を超える選手が続出している。しかも、デル・ポトル、チリッチ、ツォンガのような巨体の選手でも、足が速く、それなりに細かい技ももっている。こういう選手が絶好調の時に当たれば、フェデラーといえども苦戦する。昨年の全米オープンはまさにこのパターンだった。こういう時代に何年も年間チャンピオンの座に居続けるのは驚異としか言いようがない。それは女子のテニス界を見れば分かる。毎年、猫の目のようにトップテンの選手が入れ替わっている。男子もトップのフェデラーを除けば、ランキングの移動は激しい。その中でトップの座を守り続けているフェデラーの存在は大きい。

フェデラーの弱点

ここ2〜3年、フェデラーはナダルやマリーには分が悪い。それにはいくつか理由がある。長く頂点に立ち続けているフェデラーは、受けて立つゲームをすることが多くなった。ここ数年のフェデラーは攻めのショットより、多彩な球捌きという技量で若手の挑戦を退けようとしてきた。だが、全力で挑んでくる伸び盛りの若手に、技だけで簡単に勝てるほど今のテニス界は甘くない。「攻めて取る」という積極性が失われると、勢いのある若手に付け込まれる。ここ2・3年のフェデラーの苦戦は、受けて立つプレースタイルに問題がある。

さらに、フェデラーの弱点を上げるとすれば、片手で打つバックハンドである。ほとんどの選手が両手打の中、フェデラーのバックハンドはどうしても威力が落ちる。だから、多くの選手はフェデラーのバックサイドに球を集める作戦をとる。全仏のように球が跳ね上がるサーフェスでは、ナダルは徹底してフェデラーのバックをスピンで攻める。これにたいして、フェデラーは回り込んでフォアハンドで打ち返すことが多いが、相手は広く空いたフォアサイドコートへ返すだけでポイントが取れる。

こういう攻めが続くと、フェデラーは痺れを切らして、サーヴで簡単にポイントを得ようとする。フェデラーのサーヴスピードは210km前後だから、とくに速いわけではないが、コースに打ち込むのでエースを取れる。しかし、サーヴに頼ったゲームプランは破綻することが多い。

カウンター戦法

今年の全豪の事実上の決勝戦は、準々決勝のダヴィジェンコ戦だった。第1セットを簡単に落とし、第2セットも1-3とリードされた時は、誰もがフェデラーの敗退を予感しただろう。しかし、そこから何と、フェデラーは連続14ゲームを連取し、簡単に2セットを奪ったのである。こうなれば、ダヴィジェンコに勝ち目はない。彼の絶好調の波はこの試合の第2セット途中で途切れてしまった。第2セット3-1と優位に立ったところで、勝ちを意識したのかもしれない。これが3セットマッチであれば、そのままダヴィジェンコが押し切れたかもしれない。ところが、5セットマッチでは何度か流れが変わる。ダヴィジェンコが勝ちを意識し、フェデラーのショットが安定しだして流れが変わった。

それにしても連続14ゲーム奪取という珍しい一方的な展開の中で目立ったのは、フェデラーのバックハンドである。バックに集まる球をスライスやスピンなどの多彩なショットで打ち返しながらか、機を見て、角度のある速いバックハンドクロスを入れ、相手をコートにはじき出し、再びバックサイドに戻ってきた好球をストレートに打ち返すウィニングショットが何度か見られた。明らかに、相手のバック攻めを逆手にとった攻めのカウンター戦法である。バック攻めを想定したカウンター攻撃のトレーニングを行ったのだろう。最後までフェデラーは攻めの姿勢を崩さなかった。同じシーンは決勝のマリー戦でも何度も見られた。序盤からマリーがフェデラーの左右に球を散らすバックハンドに振り回され

ていた。フェデラー（陣営）がバック攻撃に対抗する研究を重ねて、それを逆手にとるカウンタースタイル攻撃が実を結んでいる。

どこまで記録を塗り替えるか

今年の全豪オープンのフェデラーを見ると、さらに四大大会優勝記録を塗り替えるという期待が高まった。若手の台頭とともに、フェデラー自身も進歩しているからだ。難敵ナダルは故障がちで、四大大会でフェデラーを確実に苦しめる絶対的な難敵が見あたらない。しかも、フェデラーのプレースタイルが、四大大会を乗り切るのに理想的なのだ。

四大大会で優勝するには、7 試合も闘わなければならない。5 セットマッチのために、1 回戦から 4 時間を超えるゲームが続く。一日おきに 4 時間マッチをやっていたら、体力のある若手でも決勝に辿り着くまでに消耗してしまう。今年の全豪でも、フェデラーとダヴィジェンコ以外は、かなり長い試合を続けている。チリッチもツォンガも 4 時間マッチが続き、フェデラーやマリーと対戦する前に勝負がついていた。

フェデラーのゲームはポイントを失うのも速いが、取るのも速い。だから、ゲームが 3 時間を超えることはほとんどなく、今年の全豪オープンではダヴィジェンコ戦とマリー戦こそ 2 時間 40 分かかったが、それ以外のゲームは 2 時間以内で収めている。これはフェデラーのテニススタイルから来る。ナダルのようにストローク一本で勝負する選手は自然と試合時間が延びる。ところが、フェデラーはフォアもバックも一球ごとに球種（フラット、スライス、トップスピン）とコース（フォア、バック）を変えて打ってくる。それにサーブエースとネットプレーが加わるので勝負が速くなり、ゲーム時間が短くなる。ストローク合戦を 5 セットやるのにくらべて、半分の時間でゲームを収めることができる。この体力を温存できるテニススタイルが、四大トーナメントの歴史記録を塗り替える重要なポイントなのだ。サンprasやフェデラーのようなオールラウンド・プレーヤーが四大大会のタイトル記録をもっている理由である。

スイスとハンガリーのテニス界

ここまでフェデラーを論じてきたが、フェデラーは小国スイスの出身である。実はスイスのテニス界とハンガリーのテニス界には浅からぬ関係がある。

今では想像もつかないだろうが、1970 年代から 80 年代にかけて、ハンガリーのテニス選手は欧州でもトップレベルにあった。タローツィ・バラージュ、マハーン・ロベルト、スーケ・ピーテル、ベニック・ヤーノシュという面々がハンガリーを代表する選手で、彼らはドイツ、スペイン、ユーゴスラビアなどにテニスコーチの出稼ぎにでかけることができる時代だった。当時はまだ、ドイツでもテニスは人気がなく、ソ連にもこれといった選手がいなかった。

ハンガリーのテニスは伝統的にクラシック・スタイルで、ローズウォールを手本とするようなフォアはドライブ、バックはスライスの綺麗なテニスである。マハーンが 1981 年に

日本へ観光にやってきた時に、その年の学生王座をとった法政大学テニス部に連れて行き、個人戦準優勝の村田有季彦選手と対戦してもらった。持参したラケットのガットが切れたので、マハーンは借りたラケットを手にして、最初のレシーヴ・ゲームこそ失ったが、後は 6 ゲームを簡単に連取した。「今まで見たこともないようなバックハンドのスライスが、手許で伸びてくるので非常に打ちづらかった」というのが、村田君の感想だった。マハーンは日本で言えば神和住や九鬼の世代の選手で四大トーナメントにも出場した経験をもち、当時は全盛期を過ぎていたが、まだデ杯選手だった。今年の全豪決勝で負けたマリーが同じことを話していた。「フェデラーのスライスが低く伸びてくるので、前へ出ることができなかった」と。

時期は前後するが、1980年1月に欧州チーム対抗戦 **Kings Cup** があり、フランス・チームとの試合を見に住商駐在員の飯尾さん（現、大吉店主）の車でジュールへ出かけた。その時のシングルス・プレーヤーの1人が、弱冠17歳のルコントである。左利きの彼はコーナーズを真似て、両手打ちのバックハンドで、バネを活かした速いサーヴを打っていた。これを迎え撃ったハンガリーの選手がクハルスキー・ゾルターンで、前年のジュニア世界チャンピオンだった。クハルスキーはこの年のデ杯対スイス戦の後に、ハンガリーに戻ることなく、スイスに留まった。当時の言葉で言えば、亡命である。この後、クハルスキーはスイスのデ杯選手になり、現役引退後はスイスを拠点としながらドイツのアンケ・フーバー、アメリカのカプリアティ、セルビアのイヴァノヴィッチ、ハンガリーのサーヴァイのコーチを務めてきた。

ハンガリー選手の中で、もっとも輝かしいキャリアを築いたのは、タローツィである。シングルスでは1982年に世界ランク13位にまで上り詰めた。ダブルスでは全仏とウィンブルドンで優勝し、1985年にはダブルス世界ランク3位にランクインした。彼のダブルス・パートナーが、スイスのハインツ・ギュントハルト。1981年の全日本オープンでタローツィは単複とも優勝したが、その時のパートナーもギュントハルトである。当時、タローツィの試合を見るために、田園コロシラムのコートにでかけた。

タローツィはクロアチアのイワニセヴィッチを発掘し、一度だけ、師弟でダブルス戦に出場したが、準優勝に終わっている（1990年ベルギー室内）。ギュントハルトは長らくシュテフィ・グラフのコーチを務めていた。ギュントハルトには2歳年上のテニス選手、マルクス・ギュントハルトがおり、この兄弟はスイスのデ杯選手として活躍した。マルクスの方は事業家として成功し、各種のプロテニストーナメントの主催を委任されている。

このようなテニス環境をもつスイスで、フェデラーが育ったのである。

気になること

力戦型でコート縦横に走り回るナダルがハードコートで膝を痛めることは十分に予想されたことだが、それだけでなく最近の顔色が良くないことが気になる。一時の驚異的なコート・カヴァリングは、もしかしてドーピングだったのではないかという懸念が消えな

い。オーストリアのクレーのスペシャリストだったムスターやスロヴァキアのコルダも、引退してからドーピングを告白している。彼等のコート・カヴァリングも信じられものだった。

ウィリアムス姉妹が登場した時も、その驚異的な脚力に舌を巻いたが、二人とも故障を理由に長い間、コートを離れていた。再び現れた姉妹の走力・脚力は、デビュー当時に比べものにならないほど落ちている。あの時の走りは何だったのか。長期の休養はドーピング検査から逃れるためだったのではないかという疑念が消えない。

テニスがオリンピック競技になってから、ドーピング検査が厳しくなったようだ。ナダルも毎週、居所を通知しなければならないとこぼしているが、故障の頻発がドーピングの後遺症によるものでなければよいが。